

町の活性化に主体的に取り組む 「閑谷學」を軸に探究心や行動力を育成

わけしずたに
和気閑谷高校
(岡山・県立)

岡山県南東部の中山間地域に位置し、学年3クラスという小規模な和気閑谷高校。同校オリジナルの探究学習「閑谷學」では、生徒が学校の垣根を越えて活動するなかで自己肯定感を高め、社会の課題に対する主体的な姿勢や行動力を育んでいます。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

🔍 総合的な学習の時間 🔍 探究学習 🔍 地域連携 🔍 小中高連携 🔍 外部人材の活用
🔍 ルーブリック 🔍 一枚ポートフォリオ評価 🔍 MSC評価

各教科の授業と探究学習、 2本柱の改善に重点

岡山県立和気閑谷高校のルーツは、江戸時代前期に岡山藩が開学した「閑谷学校」にある。地域の指導者を育成するために広く門戸を開いた、日本最古の庶民のための学校だ。現在は普通科とキャリア探求科の2学科において地域の多様な生徒が学ぶ同校。校長・香山真先生は「学ぶ志をもつ多様な子どもたちを受け入れ、一人ひとりの個性や能力を伸ばしてきた閑谷学校のDNAを、しっかりと引き継いでいきたい」と使命感をもって学校運営にあたっているという。

現代社会をにらんだ現在の同校教育目標には、「主体的に考え、課題を発見し探究する人」という人材像が掲げられている。そんな人材の育成のため、この数年、次の2本柱の改善に力を入れてきた。一つは各教科の授業だ。教え込む授業から脱却し、生徒の探究心を引き出す授業への転換を推進。扱う課題や授業方法の工夫に、学校ぐるみで取り組んでいる。

もう一つは、総合的な学習の時間で展開する、「地域との関わりを重視しながら、自ら学び自ら考える姿勢と問題解決していく力を身に付ける」という目標を掲げた探究学習「閑谷學」だ。

この2本柱の相乗効果により、同校は数年間で大きく変わった。何によってどう変化したのか、同校独自の取り組みである「閑谷學」を中心として見ていきたい。

町との協働プロジェクトで 教育の充実化を加速

「閑谷學」の最大の特徴は、地域との密接な連携だ。地域連携を行う学校は少なくないが、その幅広さと深さにおいて同校は際立っている。

総合的な学習の時間は2005年度から「閑谷學」という名で実施しているが、当初は教室内に閉じた内容だったという。体験的な活動によるキャリア教育の必要性を感じていた主幹教諭・大野浩志先生らは、校内にプロジェクトチームを立ち上げ、「閑谷學」にインターンシップや進路に関する探究的な学習を導入した。しかし、当時は導入に慎重な意見が多く、重要性を何度も訴え、ようやく数時間の体験的な学習の実践にこぎつけるという厳しい状況だったという。

そこから地域連携による活動が大きく進展したのは13年度のことだ。同校は和気町で唯一の高校だが、少子化により定員減が続いており、15年度より学年3クラス体制へとさらに縮小されることが決まっていた。

そんななか、地域の衰退を防ぐためには教育の充実が重要という和気町の思いと、特色ある教育活動によって生徒の学力・意欲を伸ばし魅力化を図りたいという同校の思いが一致。地域の商工会や小中学校を含めた幅広い連携による「和気閑谷高校魅力化プロジェクト」が立ち上がった(図1)。試行錯誤しながら、さまざまな場面で生徒が地域で活動した



School Data

1670年設立／普通科・キャリア探求科
 生徒数341人(男子167人・女子174人) 進路状況(2018年3月卒業生)
 大学26人・短大9人・専門学校35人・就職37人・その他2人
 岡山県和気郡和気町尺所15
 TEL 0869-93-1188
 URL http://www.wakesizu.okayama-c.ed.jp/

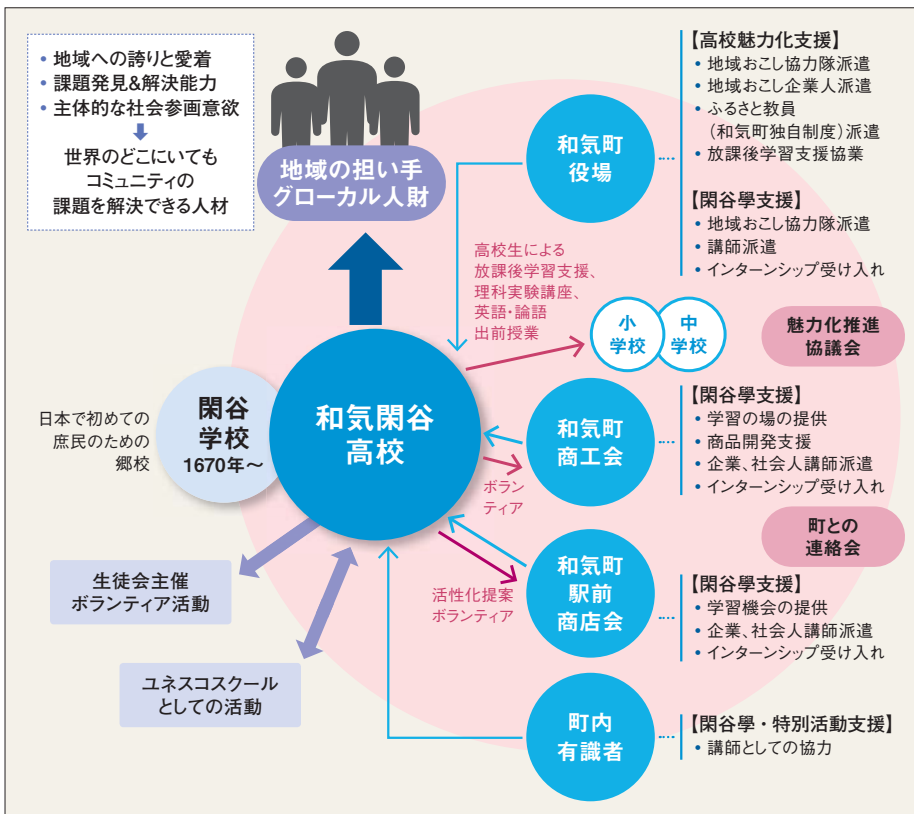


「関谷学校」の学びに倣い、毎朝クラスで論語朗読を行う。

Outline

日本最古の庶民の学校「関谷学校」がルーツ。普通科に3類型(理・文I・文II)、キャリア探求科に2類型(総合・商業)あり、学科を越えた科目選択も可能。中国・韓国・台湾の5つの高校と協定。2011年にユネスコスクール認定。16年に第7回ESD大賞文部科学大臣賞受賞。同校中心の「和気関谷高校魅力化プロジェクト」が17年に第7回キャリア教育推進連携表彰(文部科学省・経済産業省)最優秀賞受賞。2018年度より生徒全国募集開始。

図1 和気関谷高校魅力化プロジェクトの全体像



り、地域の人が同校を訪れて講演や指導を行ったりするなど、地域社会を支えていく人材育成につながる質の高い教育実践に学校と地域が共に取り組んでいる。「それまでインターンシップ先は和気町に限らず広範囲に及んでいたのですが、町内の企業に依頼できるようになりました。近い関係で連携できるようになりました。先生方の反応も変わり、今はみんな

なで頑張ろうというムードになってきました」(大野先生)
 プロジェクトの一環として、14年度より町は地域おこし協力隊を支援職員として同校に派遣。現在は3人の支援職員が同校に常駐している。前職も出身地も多様な支援職員は、地域とのパイプ役となつて連携の道筋をつくり、教員と共に探究学習のプログラム設計や運営に携わ

ってきた。また、それぞれの社会経験を生かして生徒へ指導も行う。昨年度から支援職員として「関谷学」を担当する中村哲也先生は、「自分の将来も社会の未来も自分で変えていく自覚が大切」「自分の中にある疑問や違和感を大事にしよう」と生徒に呼びかけながら指導にあたりつつあるという。3年間、支援職員とタッグを組んで「関谷学」の企画・運営にあたりつつある内田賢治先生は、当初は戸惑いもあったというが、今では「関谷学」ができるのは支援職員のおかげ」と厚い信頼を寄せている。

地域を舞台に展開する3年間の体系的なプログラム

このような連携体制の下で、「関谷学」の探究学習は、単発のイベント的な活動から、1〜3学年まで積み上げていく体系的なプログラムへと進化した(図2)。成長段階に合わせた探究学習のプロセスを繰り返すなかで、生徒自身の適性や興味・関心と社会の課題との接点のなかに将来の夢や志を見つけ、その実現に向けて進めていく内容となっている。

1学年ではまず、探究学習が必要となるアンケートやインタビューなどの手法を学習したうえで、「地域に学ぶ和気関谷高校の問題解決」に挑む。クラスを解体した5つのゼミに分かれ、地域の企業の取り組みや実践を参考に、同校をより良くするための提案を行うというものだ。昨年度は12月に1学年全体で手作りのオープンイベント「わくわくフェスタ」



代表生徒がMSC評価(※1)に取り組み学力向上評価委員会で発表。

を開催。ゼミごとに、小学生向け英語チームや論語かるた、ピオトープの紹介などに取り組んだ。そこでの体験からもヒントを得て、「和気高のイメージアップを図るため、イベントを増やしてたくさんの人に来校してもらおう」といった具体策を考えた。

2学年では、さらに深く地域と関わりながら、地域課題の解決に向けて活動する。進学希望者は各自の希望進路や興味・関心に合わせて「いのち」「くらし」などのゼミに所属。数人チームで個別テーマを設定し、地域をフィールドに仮説・実

証・検証を行う。一方、就職希望者は、インターンシップ体験を基にした労働や産業に関するテーマにチームで取り組む。また、昨年度は進学・就職希望者混合による「コラボレーション」ゼミも設定し、地元企業と共同で化粧品開発に取り組んだ。コンセプトづくりから補助金申請のプレゼン、東京のアンテナショップでの販売にまで携わった。

3学年「閉谷学」では、個人で「卒業研究」に取り組む。ありたい未来の自分や社会の姿を設定し、どうしたらその姿に近づくことができるかについてリサーチ

し、2000字の論文やポスターにまとめるというものだ。テーマは「AIに負けない接客をするには」「介護の現場の負担を減らすもの」など進路や興味・関心に関連したもので、それぞれの現場に足を運んで調べてまとめている。

このように、いずれの学年でも地域における体験的な活動が核となっている。「活動の場があると頑張れる生徒たちなので、積極的にフィールドワークを行ってきた」と、閉谷学・LHR委員会の藤澤晃先生。生徒の振り返りコメントを見ると、「実際に働いている人の話は説得力が

あるので自分の経験値になる」「企業の人にインタビューして、社会に出て役立つことを高校時代に身に付けておくことが大事だと思った」など、実社会との接点から多くを学んでいることがわかる。

**自分の言葉で探究成果を発表
地域の人も高く評価**

「閉谷学」では探究内容を自分の言葉で人に伝えることも重視しており、年度末には地域の人も招いて発表会を開催する。昨年度は3月に、1学年がグループ別ポスターセッション、2学年は舞台上で


図2 総合的な学習の時間「閉谷学」の3年間の概要

1学年：探究の基礎トレーニング (1単位)


○探究学習を行うのに有効な手法を学ぶ
○グループ活動を通して、自他への想像力、学校や地域と自己の強いつながりを感じる

1学年の取り組みテーマ

ゼミテーマ	より良い学校づくりを考えるための実践
クラス環境	論語かるたなどの小学校出前授業
スポーツ	「わくわくフェスタ」でスポーツゲームの企画、実施
イベント	「わくわくフェスタ」で英語ゲームの企画、実施
広報	同校イベントの取材、校外への発信
ピオトープ	ピオトープの作成



小さい子どもも楽しめるゲームを考案し、「わくわくフェスタ」で実践。



「地域に学ぶ和気高の問題解決」について、年度末にチームごとにポスターセッションを実施。


↓

2学年：自分のテーマで探究 (2単位)


○テーマに対する探究学習の目的、計画を教員と共に立案し、探究できる
○探究学習を通して、社会の諸問題と自己および自己の進路とのつながりを感じることができる

2学年の取り組みテーマ

進路	ゼミテーマ	取り組み内容 (チームのテーマ例)
進学希望者	いのち	「防災ハザードマップ作成」「駅のバリアフリー化」など、防災、福祉、看護関連。
	くらし	「商店街のイルミネーション点灯式を盛り上げる」など、和気町の魅力化の提案、活動。
	こころ・ぶんか	中学校での論語出前授業、和気町主催子ども塾運営サポートなど。
就職希望者	コラボレーション	町内の化粧品メーカーと共同で地域特性を生かした化粧品の開発に取り組む。
	インターンシップ	インターンシップ体験を基に労働や産業に関するテーマで探究。



「コラボ」ゼミが町内企業に提案し、地元素材のハンドクリームを商品化。



就職希望者は町内企業・団体を中心にインターンシップを実施。

↓


3学年：進路に向けた探究 (1単位)


○前年度までの取り組みを発展させ、自己の進路実現につなげることができる

卒業研究テーマの例

- 園児の気持ちを理解できる保育者になるためには
- グローバル化時代に必要とされる人材
- AIに負けない接客をするには
- 理想のプライダルメイク
- ローンを組まずに家を建てる

「卒フェス」のシンポジウムでは、学年を越えて熱い議論を展開した。





国際系に進みたい生徒は、フィリピンの文化からごみ問題解決策を探った。



閑谷学・LHR委員会
(支援職員)
中村哲也先生



閑谷学・LHR委員会
藤澤 晃先生



閑谷学・LHR委員会
(取材時)
内田賢治先生



主幹教諭
大野浩志先生



教頭
上野修嗣先生



校長
香山真一先生

パワーポイントを使ったプレゼンテーションの形式で、1年間の学びの成果を発表した。また、3学年は12月に「卒フェス」と題したイベントを開催。前半は各個人の卒業研究成果に関するポスターセッション、後半は全員の卒業研究内容に基づく議論から後輩へのメッセージを導き出すというシンポジウムを行った。これら発表会は、司会を含めて生徒主体で運営している。

発表会に参加した地域の人からは、「インターネットで調査するだけでなく実際に地域に出てヒアリングやアンケート調査を実施して提言や実践に結びつけていることは大いに評価できる」「どの発表も動機・仮設・検証・まとめの流れが確立しておりすばらしい」といった賞賛の声が寄せられた。

**PDCA推進のカギとなる
メタ認知能力を鍛える**

このように手ごたえが感じられる探究学習だが、同校が目指す「探究する人」とは、高校卒業後も自ら課題を見つけ改善するPDCAを回していく人のことだ。それには「C(評価)」の育成がカギだと考え、さまざまな場面で生徒のメタ認知につながる多様な評価方法を採用。学びを効果的に生徒のなかに落とし込むとともに、評価スキルの育成を図っている。

例えば、「閑谷学」をはじめとする幅広い教科学習でルーブリックを活用。目標を可視化し、その達成状況を自ら確認できるようにしている。

また、他人との比較ではなく自分の変化をとらえる視点を内在化させるため、5年前から「枚ポートフォリオ評価を導入。「閑谷学」でも活動による各自の変化を客観視させている。

さらに、一部の学年では、「MSC(Most Significant Change)評価」(※1)の方法を活用。1年間の「閑谷学」の振り返りとして、自分に起こった最も重大な変化は何か、それはなぜ起こったのかという問いに取り組んだ。17年度は授業評価においてもMSC評価を導入し、評価委員会には生徒の代表も参加した。

**自己肯定感の低かった生徒も
主体性や行動力を発揮**

実は、入学時点では自己肯定感が低く、人前で話すことに苦手意識の強い生徒が多いという。そんな彼らが、高校生活を終えるころには自信をもって自分の探究成果を語る。

「校外外において責任感をもって多様な経験をすることで、町の活性化や学校の改善に貢献している感覚を得たり、誰かから直接感謝されたりして自信を付け、意識や行動が変わってきました。彼らは力がないのではなく、力を発揮する機会に恵まれてこなかっただけなのです」(内田先生)

生徒の言動の具体的な変化を、教員は口々に語る。

「社会のことも、他人事ではなく、自分事として考えられるようになってきたと感じます」(藤澤先生)

Interview

和気閑谷高校卒業生
祇園大輝くん(就実大学1年
／写真右)・松井竜輝くん
(岡山商科大学1年／同左)



地域の協力があつての学び

「閑谷学」の卒業研究では、介護ロボットに関するテーマに取り組みました。調査にあたって近所の高齢者施設が快く協力してくださり、こうやって地域の協力があるからこそ貴重な学びができるんだと実感しています。最初は「高齢者を支える介護ロボット」が必要と考えていたのですが、探究を進めるうち、介護には人間の関わりが何より大切だと気づきました。人間の関わりを充実させるためには「介護現場の負担を減らすロボット」が必要だと思うので、将来はそれを世の中に広めていく仕事をしたいと考えています。(祇園くん)

思い通りにいかないからこそ、楽しい

高校時代から商業科目の授業が好きで、大学では経営学を学んでいます。高校の卒業研究のテーマも経営学に関連したもので、経営者の立場から、雇用するなら人とAIのどちらがよいか。それぞれメリット、デメリットがあるのでどちらがよいとは言いきれず、「僕ならどちらを雇う」という結論を出しました。「閑谷学」の活動では、思い通りにいかないことがたくさんあります。だからこそ、面白かった。「こうなるんだ」と気づくことは、本当に楽しいです。(松井くん)

「町や学校に対して、何かをしてもらおうという受け身なスタンスがなくなり、「自分から動くことが大事」と、生徒の口から聞かれるようになったのは大きな成長です」(大野先生)

昨年度、同校に着任した教頭・上野修嗣先生の口癖は、「生徒たち、すごいだ。」「自らどんどん動く生徒たちのエネルギーに圧倒されます。学校の規模と生徒たちの活力は、必ずしも比例しないのだと実感しました」

その影響は地域にも広がっている。同校生徒の地域における活躍を目にしてきた地元中学生が、「自分たちも頑張りたい」と言って入学するように。同校が地域住民と高校生が町の未来を語り合う「多様な主体による協働会議」を開催すると、地域から多くの参加者が集まる。

「地域の方々は、自分たちが関わること、高校生が活動的になり、それが町を良くするという手ごたえを感じてく

ださっているのではないのでしょうか。人口減少は免れなくても、高校生がそこで暮らす大人たちと目を輝かせて共に町づくりを語っている…そんな未来に向けて少しずつ進んでいるように感じます」(大野先生)

教員もまた、生徒のエネルギーに後押しされ、地域との連携、外部人材の活用、授業改善、評価手法の検討など、次々と新しいことに取り組んできたという。

「最初から順風満帆だったわけではありません。しかし、動き始めると、まず生徒たちが生き生きしてきました。そして、その姿に教員たちが励まされ、挑戦を続けてくることができました」(香山校長)

地域に根づく学校として歴史を刻み続け、2年後には創立350年を迎える同校。「もっと生徒を伸ばすことはできる」とさらなる進化を図っていくという。

※1 MSC評価：事前の指標を用いず、現場から「重大な変化」を集めて行う評価方法。